

誠忠
烈傳

五代雜記

新

13

2910

3

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9



娼妓薄雲

アウの
それあり
かゝりて
水の甲と
南へゆゑ

君そ
ついであり
一解
芽蔭



一時快樂
无明醉
轉醒長夜
曉

足利左金吾

頼兼
雛川
在完
閑居
之靴
之員
忠一



極れ流る
の解

一
芽
藤
虫

妖僧
音院



彈正長男
仁水大藏
正為

及び
人
又

侍婦
科





今乃のひやまれとてお小娘
今小に花咲く陸奥の棠
長 片浦宗保

沢井の
甚之の
至

無
常

千松



政岡一子

一册
芳藤

片浦
帆
保宗郎



其の五

稲野の屋半治郎



おの花の
いざよひの
ちどめ

女田楽
津多代

荒波の
枕の助

音六



誠忠列傳 珍説千代碩三輯卷之上

第十三回

東京 爲永春水著

却説その夜丹助のお累が元へ忍ばんと宵より竊小
 家と抜か仁木の茅み赴き先の案内の女存儀の
 圓まきうらみろまら裏のへと歩みあり桂せびま
 りと用く扉の縁へのき笛と飲ひつらるる置と溜
 まりく被植込も心忍のゆき見まら遠うみ北の方

くる庭を隔一別亭の藤子の透より落くと浅
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 なる灯籠のまゝと小石をねん心合場の砥須
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 更極子を待うちも曾の鞠く身ハ戦く折しも一
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 個の腰元が片手小持一雪洞の灯りを合好へ
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 浅らまゝと神小寝のく庭下結の音まゝとせと
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 忍びより近づくと寝ふとろ一見て
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 庭におまけ久丹ハイ丹助とどおまを
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 這方へお出控せモウく先刻のくお栗さぬかさん

うおお待りあゝとてとどおまをせん三丹一とりやア
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 正とどおまを久く
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 庭におまをせん私一やア敏くお庭へ下りて合場を控
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 庭のを侍の七層のくひとどおまをものとものを形
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 いふうちもお待りねとどおまをせんサア這方へ下りて
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 庭におまをせん私一やア敏くお庭へ下りて合場を控
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 別亭にお近寄るは藤子と浅まゝかのりうと蘭
の庭を隔 別亭の藤子の透より落くと浅
 庭のまゝのあもつらとどおまを身ハ仙境へ誘ふとと

疑うたがへままおおままををりり 嬉うれしくくをを行こふふままららくく 惶おそめめば
那あの腰こし元もとのの内うちみみ入いりり 何なんののちちもも 悔かいいがが 又また外とのの方かた
ままゆゆぐぐ ううええ「ササアアおお茶ちさんさんおお揚あんんううままるるままーー 丹丹平平
只ただ今いまトトののぢぢららくくままるるゆゆめめ ううええ「アアレレササ何なんををいいふふままににまま
知しららししいいおお孫まごささぬぬががモモウウくくおおままをを擦こすすららくくおお在い
其そのままののままはは三さんとと六ろくままいいてておお進すすみみををいいままトト言いひひな
ぐぐ先まづづみみををええつつてて引ひ揚ひげげ内うちみみののおお孫まごがが
いいちちくくととおお「ヲヲヤヤ丹にさんさん直よくくく来きてておお呉くんんささららににななるる

丹平

私わたくしままららアア寤あううトト言いひひううけけてて完またた笑わひひ一いち羨うらまましくく一いちささ
只ただままのの腰こしをを今いま宵よハハ別わかりりにに化か粧まをを心こころををせ
用もちひひ一いちそのそのううままおお孫まご衣えのの修しゆめめああどどけけをを居ゐるる
ままのの崩くずれせせばば糞くそままどどきき排はい縮ちゆう緬めんのの陽やう春しゆんままをを握とままええ
見みゆゆららふふ丹に助すけがが魂たまハハとと身みみみととららどど只ただ放はな心こころとと見み
物ものをを居ゐるるああどどおお孫まごハハ腰こし元もとをを側かたへへ寄よびび 丹に平へい今いま
言いひひららししるる人ひと買かひひ久くららののハハイイ使つかハハ私わたくしがが吞の込こ心こころ居ゐるるままにに
ううらら七しちツつののおお時とき半はんがが鳴なりりままををととおお知しららしし世よももははくくヨヨ

お、ま、い、ち、や、う、さ、う、遠、行、不、用、ハ、ま、の、う、ら、う、確、り、と、休
ま、る、ら、の、と、一、左、極、ま、ら、四、城、塔、よ、う、丹、き、ん、四、四、り、と
お、吐、一、の、ま、い、ま、一、ト、言、ひ、捨、て、ま、ら、と、ゆ、く、お、一、丹
き、ん、何、故、そ、ん、の、ふ、精、れ、ご、ま、う、の、顔、を、一、と、お、在、る
ま、る、の、ご、一、む、お、茶、を、ん、の、気、じ、や、真、の、義、理、一、遍、心
ま、る、ま、さ、ご、と、ん、ご、変、を、な、ご、と、思、ら、う、も、お、在、る、ら、う、を
お、り、ま、せ、う、け、は、ご、も、お、ま、や、ア、昨、夜、も、お、心、言、ら、と
進、ご、と、う、り、今、ま、う、お、茶、を、ん、が、得、か、を、な、ご、と、下、さ、ら、

ま、は、り、ア、や、ア、は、ま、ご、ん、居、る、の、積、り、心、お、り、ま、ご、と、う、ま、う
思、ら、と、お、思、ら、ま、ご、と、い、ヨ、丹、一、私、ハ、一、段、心、も、貴、女、お、が、う
中、心、お、同、心、お、思、ら、ま、ご、と、ま、ご、と、其、終、死、ご、も、本、望、ご、
ご、ご、お、ま、ご、と、お、一、ラ、や、ア、お、茶、を、ん、も、と、ん、ご、も、安、め
の、ご、ヨ、ご、り、や、ア、モ、ウ、飛、合、も、安、め、お、も、お、ら、り、お、茶
を、ん、お、思、ら、う、言、ひ、ま、ご、と、私、ま、や、ア、思、ら、ご、一、甲、斐、文、が、あ、る、と
お、の、ご、ご、う、ご、ご、ん、ご、の、ま、ご、一、の、り、お、思、ら、ま、ご、と、せ、ん、ヨ、ト、ま、ご、
ご、思、ら、ご、一、袋、戸、柄、よ、り、葉、子、簾、笥、と、お、ま、ご、の、西、洋

硝子の濁を取り出し 女「ア、ウお茶をんハお酒ハ
勝ひごとお言ひごけきども 尾ハ備後の鞆とゆふ
野の中村吉田勝とゆふ 内々精磯梅酒とゆふのぞ
寔ハ甘いのをとりまひくらお菓子とお肴ハ一ツ
お腹んまよハヨ今ねハお茶を買うくらくらして進
まひくらト言ひくら角分と決の方の基子の
湯と糸焼の奇撰ハ土籠へ取りけし遠方の
火鉢へくけきどもさるお丹助ハさくらもあつた
丹助ハさくらもあつた

ぞ不見くらまハ甘ぬりと物と冷くさをあつた 丹ハゆ卒
寔ハお権ひるまらして下さるまきなる期うつして居る
うちも修根ぞお出るまらハおまのくとあがぬハ
どぞおません 女「ナニ遠所ハ母屋と寝まき居る
くらは二とくらハ大きな声とおこの下や屋ま
あつたのくらハどうも修中もあつたやアおませんヨもん
心配とおおたよや折角初うしてお見ふくらんも
あつたあつたのくら遠所とお茶をんハお酒の
居る



針の
あり
の
あ
る
ま
と
も
あ
ら
ぬ
味
の
書

後りふしてお茶でもお茶と女房とも妻ともおのつて
お呉んさんといふ子エソしてアせんるお變ましく思はる
あく居るてお在るくもくても眞ひとやアありません
嘉些遠方の火鉢の側へお寄んるといふヨウ丹一ハイ
何ぞお教へやア爰の申る公おぢくごぢかまは ねい
爰ふしてお呉んやアおまきやア ねいおぢくごぢかまは
まうごけまどもお茶たんのお肉爰さんあるつて後り
居るまゝありまゝいふ女ごと輕漫るいで末永く可

お茶ぐらにお呉んさんといふヨト言ふとき土籠の湯が熱
湯なる おいホーお吐くおうりまてお茶のゆをさるたり
まてまては舞のこのサウ〜ト笑ひあがら申る
茶を入きに下へおろし おいサア丹さんお茶の出る
うち梅酒を完う一ッお飲んるといふお猪口が小蓋
うら二ッや三ッお飲りても碑ハはませんハ子丹一モウ
唯今の心海山心まゝかまをツイに當りが眞ひのど
うらうら一盃のまきま〜ら大さう 碑ひま〜ら

其お心から私しや命お替ても然うのうへさぶさぶの
まはけはとも第一然うも七のうらふはびりか
初はすしとさ私の體へみかごめしふるうも厭ひ
ませんが貴公のお名が出来るは実におも
アレサせんみりて怖がるらひらうらぬる老や
斯う言やアなるい子若見つうん六ヶくうりや
お茶たんと同様お死ぬかの度サとさしど思つて
居るのうら可憐そうごと思つんお笑んるさいな

丹一とやア貴公真実心どさかまはれお欺しうら
ちやアお怒り心どさかまはれヨお茶たんも疑ひ
深い子エまとも空ごとお思ひらうサ私の體を
おふも自中おたて四覽ホニ端唄の文句トやア
おのけはとも候ふるら公の中を割つて見
せし進まのヨト言ひらう丹助の手をあらうり
振つんお一お放アらんるお迷つてらうまト言ふ
お燈心が由とせん心行燈が落晴くするお一

ヲヤ丸の利と灯りどヨ丹ハモシ丸ハ丹ハ命と老つて
下さいまート言ひつ屍風と建まらぬを折しも春
雨降り出で衆人あぢぢぢど更ぬける

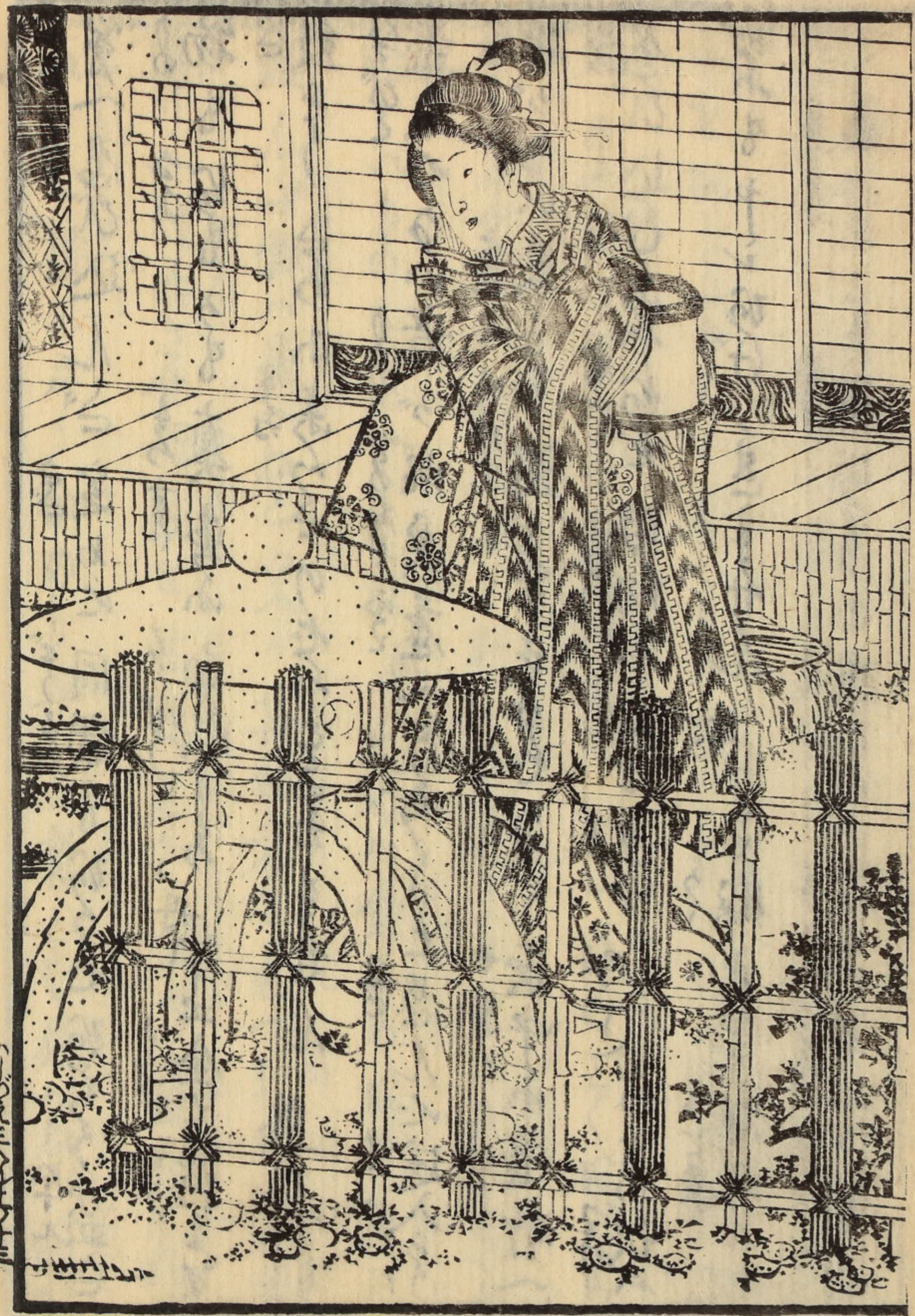
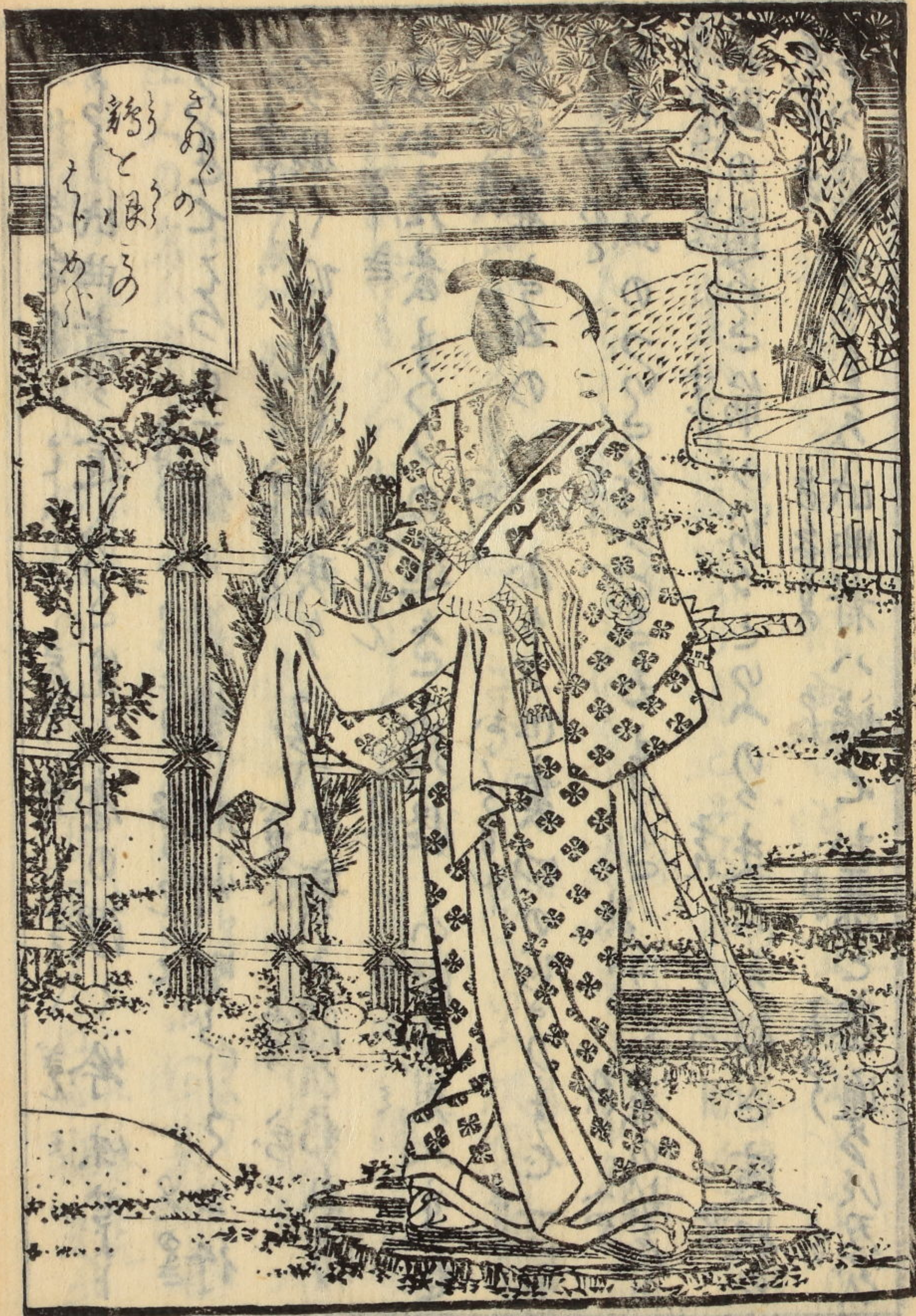
第十四回

爰結ぶるも春の夜の果敢多くとぎん曉の七ツを
報ゆる時斗の音折る来くる腰元が屍風の外
より窺ひあがる一モシ七ツとどどかきヨヲヤ
賤賤とどどたまた久ト言ふとき内より屍風を吹く

一ヲ能く知らば世々異世とノウクま心買ひくら那方
お湯が沁居るさうお砂糖湯ふる七持て来な
ハイト言らんまらんゆく一丹えんヲ宛ら輝る仕
度とお方の久きんさううえと逝おさるの心も
まご早のハ子丹ハエまごあんまり避くかりも尻と
肉の都合が悪うどどあも尻くらト言ふうちお蒸ハ
手筈のうちより小判を放ぬり出ー一ぬアアお蒸
たんふ何ぞぬ馳走がなるいぬも人目があらぬ自

出来さく定めて盗んぶ物もあらう那奴が身
中をあらうと云ふ言ひまて皆く立り懐より身を
入まに残る方多く捜搜し一俵のぐく取らる
まじく紙の包んぶ小判一枚まより他は是れをといふ
怪しいものも見へませぬ秋一丈心の金子のあらう他に
盗んぶ物ハ見へぬといふ其曲者を是れ引けト目
通りへ引取させ丹助を叱度見せ秋一ヤイ盗人見れば
支刀を腰ふさし余の卑し者とも見へぬが心

第一忍び込んど定めて同類もあらうをあらう盗んぶ
物も何もかも真実ある白状し秋一丹一正全く盗ま
ばさうとあらふ事らこのをいふとさかません秋一ア
盗人心の者が此実座へうとくと忍ん心遠入ら
ずぐらうまとも盗まをさるを多く秋中亦遠行へ
忍び込む事ら仔細のあらう丹一ハイその次ハ
まよもやしめあげはせません秋一イヤ躲まやど指怪しい
コレ若黨ども雨あがりの道ゆゑ小定めて置法があらうを



さうどと我盗も 這処心 三兩那行心 二支流心
池の事も一うく盗んご 金ハ忽地おと酒ふまひ
捨賣あひあひぬ 小盗も阿漕の浦あましく廻の
度ささるる天の網捕へらるる六自業自とく今
宵の雨と伴ひお忍び込んど 小亭がお懸さぬと
り方の船屋ともあつたお言ふ盗も出く其一
両思ひがけり 足出が健たあつて盗もささ
お懸さぬと迷惑とさせぬわともお毒の毒もあ

此う名のお慈悲あ私の主人の名もお懸板のお名も
出ど変様便お海もんやうお取牛ひ下さるる私の方ハ
おふざら一終あつらうと身も出さ精ちらとも
厭ひのりもせんト死と宛あてハつらくお常あ
他合ぬ丹助が旗く一言業と秋九郎ハつらぐ安ん
冷笑ひ 秋ハ九盗賊とさるものハ其身の罪を道れんと
言ひ暗まはか人情多うと改ハまお引替く家と
き身の罪と言ひまお懸せうとふが不審の分一

是れ心も密ま心あつてもいり素よりお累ハ父の志妻
不義強奪があらるとき六尚守を頼る俺們が落度
吃度吟味と遂ねばならぬ是れ心も密ま心あつてもいり素よりお累ハ父の志妻
侍の新刃のけ一腰指を切し殺と刺ぎ苦痛とさきと
ろぞ心得らうトウの白鞘をさつと引抜目先へ
丁度突つてほど縁七覚悟の丹助ハ白刃の光り
阿容らう辨き丹一お多討めあつてはけし上り
最期に西目耳よりと鼻よりと血勝ち次丹助は

言ト言ハ急迫黙九郎が言ハ言ハ言ハ言ハト及也
ありあげ既ハ危なく見ゆるわしも藤子の内ハ
登りあつて一弁込九郎をさする其衆人ハ其某が
言はせ仔細があらぬ姑く付ト言ハ言ハ言ハ言ハ
よう徐くと疎正か嫡子仁本大流立出らう四下と
見まへ一太一若衆ともそ悪人の家と解き故
はら次へまて迷くト同心あつて若衆どもハ
心得てを遠く丹助が郷縛の索とゆるし人退け

わうしきをまの 大フ、言端を、私等も安心憑ひ
仔細ハ初よりト額を合せ、何日か時うらるまを
嘆くわど丹助ハ、膝を、足按ぬ物と痛むわ、
お霖かき香小、濁も、より本心惑れせし、元竟お
金、意小、随入、心、得果、を、帰、り、ける

珍説千代碓三輯上了

誠忠列傳 ちんせいのりづえ
句読講釈 珍説千代碓三輯卷之中

東京 烏永春水著

第十五回

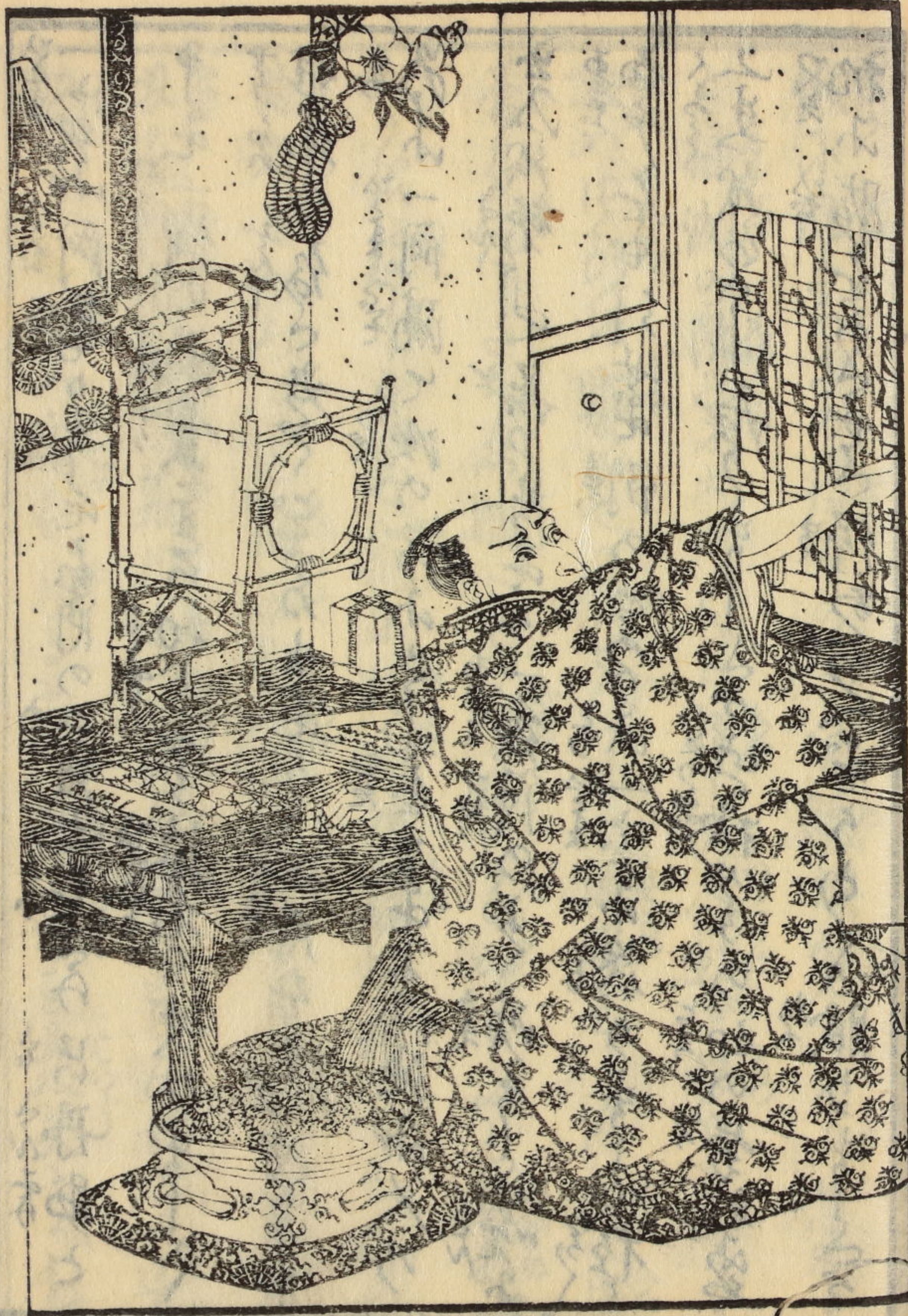
却鏡 蓮倉ゆへ、鬼貫、彈正が、逆意、目く、小暮る、小を
政岡、松枝、友、個、が、許、より、密使、を、の、つ、く、本國へ、送、り、小
報、知、来、る、秘、小、外、純、お、憑、の、深、く、心、張、若、し、あ、し、が、ま、小
行、浦、帆、十、舟、の、出、家、通、一、の、お、お、老、中、く、文、智、ま、ま、れ、
仁、ま、れ、お、お、外、純、お、對、面、し、く、蓮、倉、の、形、容、儀、竊、小

評義ありけるが今日由又片浦の外統が方小来りや例
の一間小対座ゆて「サアヤ退く漁会かひてうらの
知くせあるく容易治まる候と云ふ事おぼせせん
辨のそ辨別くく心労のほどあり入ませ「以雅
量のをうは夜の一夜で実小寐食成りよとれて
彼一最ままがゆ成中まは鬼貴公の管順の山石殿
との入内縁があるのを甚ど後一ゆくの候を
ままがゆは是はまを肉を治ままするゆていざあま

せんくろ漁会意人持物く管順家へ頼ひおまへるのま
ままの「多る種抽考ゆた頼ゆのちひままをせと
彼を鬼貴公の務貴代番の以後更と申し殊ゆ山石
殿があひくく「サアヤ退くをまを先々
念おのてみ居込んて上向候うらう人接て居るうあふ
仁は弾正と申す女女の男があつていざまされば此方
うらやちあるまを是を頼み曲くまの治まるゆ
おまをうが理の所まを由理をいざあまをうらうけ

くこきあひあつちやうをばけんしやうを 外しつちゆめ今度の一条を
理粧成白小波節を被さねる人へ勝元公の地よりござる
ますまのト陸奥の果より一七九十里なり或謂じ鎌倉
の爰順方の着る着流量り一知此物十帝が只この眼力
のそあても必ず早船の極名と喚りくはふあはれり
直 史ふつひても妙記のあらぬ附きあてござるますはける
あひ 夜の強く波る波のまをござるますはける松方の納戸へ
盗人が遠入ましく定收つたの腹を被一腰をうれ

まのそを夜拙者もろ振るる小齋懸で居りまは
何とやら納戸の方で物着の被まをの多物不潔
まのそを自ら小雲羽を捉へ来つて又ますはとたわ
盗人も迹由まを知らぬを捕まるとはますはの縁と
ま被く被まをうらま迹一ますはを結納戸の
入は小盗れが一被落しとござるまはる候令被一腰
中の被を意夜吟味成被まを被とござるまをせれど被
の又財を被とござるまをうらまを被の被へ拙者福の物不



一室小岡篇の考成由をぞり只丹助と
中を一個の着裳と直ぐ初らうと徳元を使ひし
性本もなご考ごどるおまをうと小用を中し法ある
乃小一間隔て次のるふさ一室まをより他小人の
出入成勢で居りままが一夜月のよく洗ましと呪ふ
る中をも引茶を例のさうは一室小鏡りまして極
くまはらうと飛りましとふけ極ぐらの心の勞れぬ
れ小肌をのせして居あぢくむらうと眠りましと
つえ

俄小胸さの波まのをを眼成覺てて見まを
と極例の障ふありくと怪し人形が移りまを
叔いゆゆ成寝入て居び入つる曲考あらん得とま
吾を純しとらぬ捕と吟味のまがりふと極
あり成後しまて寝小極多成寝ひ居るらちかの
曲考とをらうと障ふを明と居びより氷のど
又を抜と濯り菘川と一突と波まをら成分を
かへし有今人の扇をらうより速く又を敷矢とら

あつてはうらと入發りて逃んとする紙襪ぐみさのく
引戻り拳張掛つて曲者のいふるをうり度度人
を深うせく花出まゝかおろく月ハ雲ふ隠れ
終つとありまをうち終ふは曲者のいふるをうり
捕逃し一まゝくはれおはせのうり終りの西紙花びま
花ふあつく九人といふはまをん定めて花びの
由園をいふをいふおまをうりおはせのうりま
則ち日をもいふまをが縁の級といひわう仔細

あるまどどんとまゝくうらと入發りて逃んとする紙襪ぐみさのく
引戻り拳張掛つて曲者のいふるをうり度度人
を深うせく花出まゝかおろく月ハ雲ふ隠れ
終つとありまをうち終ふは曲者のいふるをうり
捕逃し一まゝくはれおはせのうり終りの西紙花びま
花ふあつく九人といふはまをん定めて花びの
由園をいふをいふおまをうりおはせのうりま
則ち日をもいふまをが縁の級といひわう仔細

拙者が定收付の拙者紙を〜
おまを是の二個小紙を紙配を〜
をどけやうと紙を伎倆にお違〜
さ〜る 片浦が云葉小外紙の換紙〜
さる是の紙を〜
と直を大方の紙を〜
紙元二の紙を〜
小紙の紙を〜

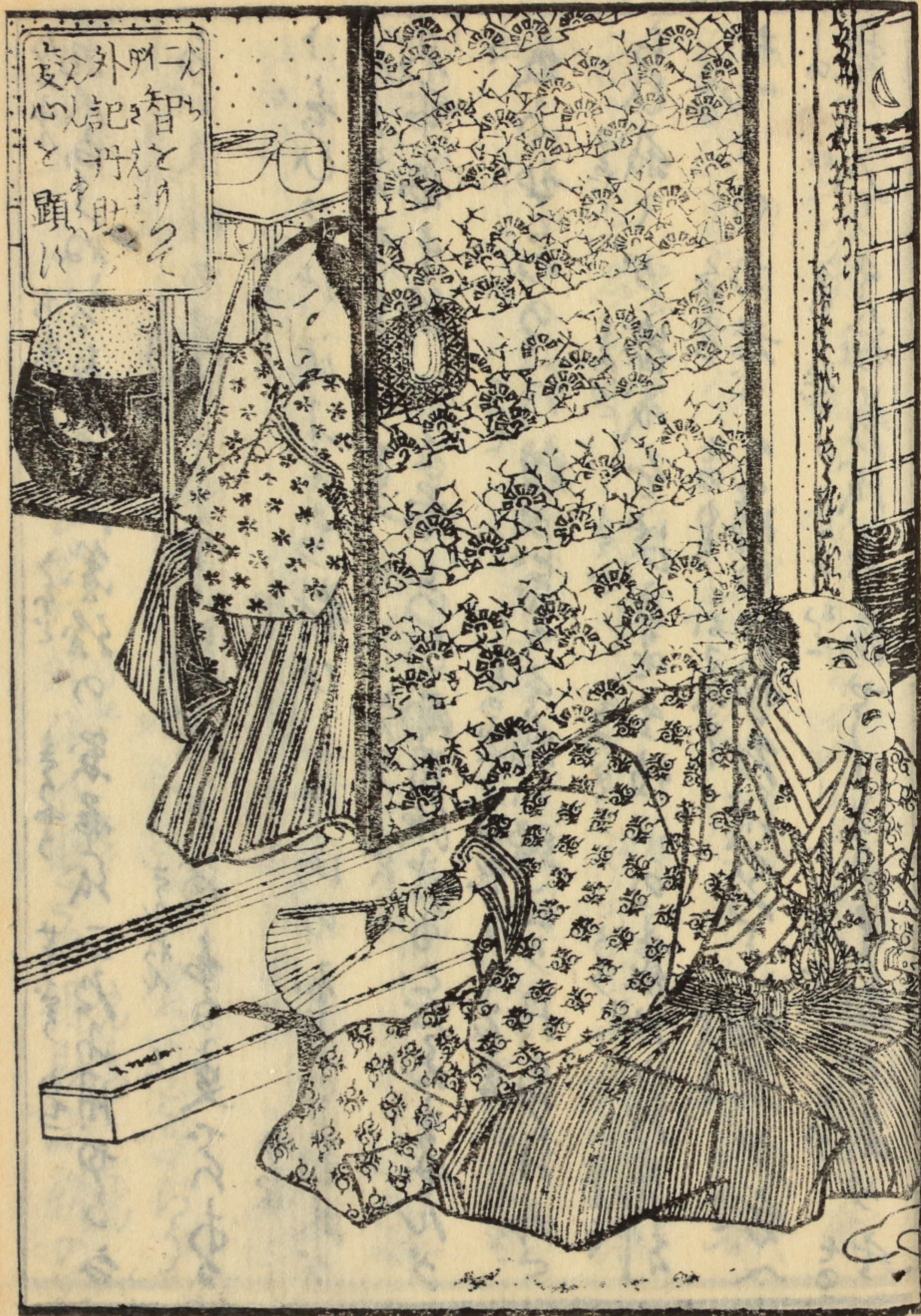
で紙の紙を〜
ト次の紙の紙を〜
イト紙へ〜
紙の遠方の紙を〜
まどせ〜
紙同紙〜

第十六回

紙の紙を〜
紙の紙を〜
紙の紙を〜
紙の紙を〜

さう弔の形紙もさうおぼやかしお札にふ入はるる
別紙は弔の札も念息やちぢとる思つた切少より
さう別紙も重た性澤をゆえ接しを方よりの愛はら
わすまのとを修ふ接重しお又ゆわ今日の形紙
門外紙もさうよせと遠方の密儀を教へて修儀は
お掛の思忠孝のたも忘御して我らが今入交儀
一とふ古徳も強念ある仁本が方へ肉をさすお相違
あるまの金銀も眠紙へさすさう情ありそのを修儀は

心通の骨おやどろ天乃の明りさう紙照を祀儀
おひあつとく神紙が件しあひぬちけしお紙のり
重罪サアの重由も重おこの場をトシ関せらト物
和らうお問後らと丹助の最希よりおふ紙紙摺
付て紙おふ紙の最らうさう紙紙あり首紙のさ
丹親おとりのひ紙もをん紙ををる紙さうさ山より
さう紙紙おとりのひ紙もをん紙ををる紙さうさ山より
紙紙おとりのひ紙もをん紙ををる紙さうさ山より
紙紙おとりのひ紙もをん紙ををる紙さうさ山より



凡人ありぬ ちかき まのく うねど 義経の義勇な まろやう 正なる せいじやう 用ゆるる もち
らば天晴の忠臣であらう あつたれ のの ちしん 成 まろやう 三 さんねん 跡 あと なる なる 変 へん であ と りある
ト い ち ち ひ ひ 汗 あせ 浦 うら ふ ふ ち ち 對 たい ひ ひ 外 がい 一 いつ 回 かい の の 知 ち り り の の 事 こと 集 あつ ぐ
不 ふ 可 か 存 ぞん ず ず 汗 あせ の の 事 こと 集 あつ り り 一 いつ 回 かい 決 けつ せ せ ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
後 ご 不 ふ 可 か 知 ち り り の の 計 けい 較 けう ぐ ぐ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
ら ら ひ ひ 裁 さい く く が が 密 みつ 衣 い を を 穿 す き き ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
お お 吐 つ の の 曲 まが 者 もの が が 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
思 し び び 入 い り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ

中 ちゆう ふ ふ 互 ご ひ ひ の の 疑 ぎ 心 しん の の 起 おこ り り 一 いつ 切 き り り 丹 たん 助 すけ お お 出 で 遣 つか り り ぬ ぬ
種 しゆ 倉 くら へ へ お お 入 い り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
當 あ り り 一 いつ と と 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
切 き り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
は は 安 あん 泰 たい であ であ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
汗 あせ 浦 うら ち ち 接 あひ ぶ ぶ 一 いつ 切 き り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
あ あ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ
ト と 概 がい 十 じゆ 節 せつ 由 ゆ 月 げつ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ 事 こと 集 あつ り り ぬ ぬ

う成云國をゆぞ今更るまんやうもあく獲て礎
を引寄す且び文をの外紀帳十帛が箇知くと
ふん修ふふしも遠へ去修る成二個の得と改
めえくたふ丹助が種金ある仁未へ切そりふをいま
やうふ一ツくお細修ふあし何とも知是ぬやうお
まくと丹州お種金へ送りなる手付外紀の行浦お
對ひ一サテ先と直を一方の片外まし一う丈ふつけ
ても丹助の國家人對しと種うぬ飛人をいふりま

よれはも茶本とら中シまう秋の自津ふもはたれまを
ぬこの景のそそけのおるふあやめ何やうともはたれまを
いふおまをう一しつの中お種うぬ飛とら中まのの先
お種修くおをふまうのしうの景をぬ飛おのこるまの
先を修ふさう一節直を交修る是ふ及んどら一うの功をの
まましう又種便の沙汰もまらう何のあはし丹助
とやうお茶本との雨をたむとらなはしてハント茶へ一
のそりてうおらんまをいふあは外紀の先おとらうち

ちん密ふ時うらるまを物たりる

珍説千代碇三輯卷之中了

朝鮮牛肉丸 一包入百銅 弘所 對中た漆崎氏

第一脾胃がやうは(腎精液はまを交妙也其外
後病小用ひを切ゆる交妙一くを能ふあう
のうは後求先は試のうく至妙ある我知りあはせ

備後朝津 中村 若菜製

誠忠列傳 珍説千代碇三輯卷之下

東京 爲永春水著

第十七回

人と知るの如くはもども己と知るの如く己と知るの
如くはもども天命と知るの如くはもども始終全きる
とゆを今が兵衆佐鬼費へよるまきと金一より
彈正ゆその女と知る遂去ふ物擔るうつら天
定りて人小勝のた理と知るざる友あるう佐由鬼費

彈正だんせいのは日ひもあるとからりんといふ家も同じ書り
密ひそにすする及びおしゆも本ほんにある丹助たすけ方かたより
密ひそ書しよ到たう来らうあらうしらが那な地ちの様まな奈な何なにんと
竊ひそ小せう是しよと密きらるるふき文ぶん面めんあら先さき達たうて後世ご
帆ふ助すけとし中ちゆう老らう忠しゆの御とゆる老らて島しま地ち人ひとん下
一いまま道みち一いつし心こころ斗と畧りやくのあり艦札せつと盗を渡せし
ととろろ首くび尾びよく比ひ浦うらの服免めんとあり却外げ紀きが居
るへ忠ちゆうびいりを服ふく免めんと落し性是しよ一いつし外げ紀きの件の

服ふく免めんと落し隠し衣内うちの老小せうもつままさまままば況て
その衣えのみらるどの一いつし向むかひへ入いり中さみどの裁さいはじりに
比ひ浦うらと懸ふ心の起しあや何とまく遠く比浦うら
どの小せうも那艦せつ札せつより外紀きと懸り是れとおもうたまま
さら對たい面めんあると死も互ふ心と引合あひのこもあらず解
方かたお讀もこまるく外紀きが心と懸する比ひ浦うら取とり
内うち心こころの知まかわるまらうへい本中ちゆうの人々びとの心の中も
量りまらと落く心と若しある様もあらう人ひとの

珍びありく 意ふ 嫌念人おろるべくも物しぎればは安ん
多かべーと 細々と 徳めあるゆゑ 鬼費いして 深
新び 一ヤナニ 深正 密書の 様ふ 日外 入るの
計ひで 帆助と 本かへきしと 方便の ありまんと
首尾よく 外記 帆十郎の 二個が げん 疑ふと 記させ
のめとらんぐる おと吉 左右 月出 友ト 入るも 更不 深正
へ 吹び 一 体も あり 満息 つつて 居る 不 鬼費
その 意と 均を 不 當と くり 不 教 一 船き 一ヤナ 深正

ワグニヤンフニ

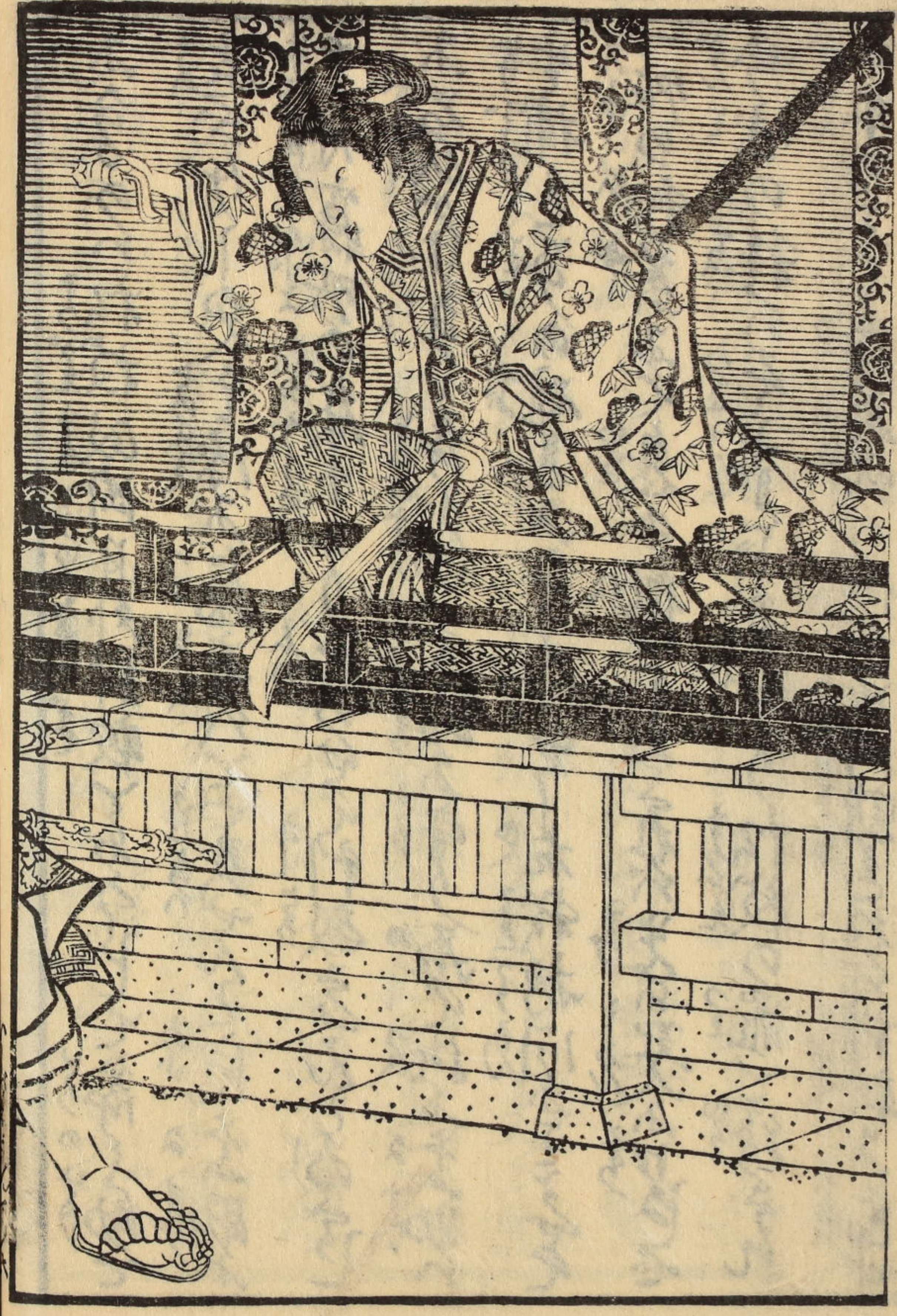
是程 月出 友 老 友と 月出 友 吹が 換ふ 由 あり
物思 一 一 意 ありて 居る 一 向 不 念 友 ぐ あり ぬ 物
を 美 公の 不 智 不 落 ありて 由 不 當 の うち 同 事
密 する 首と わけ 一 ありく 外記 へ 外記 だけ の 意 算 ぐ
ある と 入る 入る 事 一 ナニ サマ 一 團の 老 臣 あり 智 恵 也
是も あり 由 あり ぐ け 及 の あり なる 計 較
不 念 ぐ こと 入る 一 イエ 老 臣 あり こと 為 せん 私 の 切
の 底 こと 入る こと 入る こと 入る 丹 助 ぐ 内 通 事 せ 又 願

のさしことと紫のさしすまを 紫 一三 変のま 何と目 苗不
源 サア 全を廻てごころをまを 先は 文体と得と 後 下は
例の 色 有り 獨紙 不 書て 細繕 あり 致して ご 為ます
まど 是 まを 書 て 送 り ま しく の 相 落 る ど 一 字 三 字 づ
悪 ん で 書 事 の の と え へ て 悪 色 も 採 ひ ま せ ん 文 云 も
後 先 しく 不 致 未 る 書 ぎ り で ご 為 ま せん が は び 及 の 不
限 つ へ の 首 う へ 尾 ま せ 墨 の 後 目 由 正 しく え へ て
余 り 文 云 が 行 居 色 に 飛 り ま せん 文 の ま へ り 文 云
い ろ え 三 下 三 三

のう 色 不 凶 墨 の 色 が 飛 り 進 て 飛 り ま せ れ バ 必 定
那 奴 が 内 色 を 致 さ せ り と え あ ら い さ 直 と 仔 細 と 白 杖
致 し と 左 遠 方 の 計 較 の 表 と かん と お 助 お や 付
外 記 な 書 の が 作 書 不 徳 り と せ と 文 而 不 一 定 ね 遠 の
ご 為 ま せ ん 宅 不 宅 由 致 さ ま し と 出 り 且 と 現 由 と
鬼 費 ら い た ど め て 情 り 横 と お お と 全 体 の
眼 力 の 今 不 ち ど め り り ま が り 宅 不 読 き 入 と お ど
支 不 し と お 助 が え 取 り と 本 玉 の 色 が 終 り い

那等が機密と交遊して使ひつゝの地ありて外紀
帆十舟が公と合せるを討つるやあるのさう一大事
でいありまいる。ア、かく十二回もいふに及びません
僕丹助で此の老がえ取れまゝとて余のそ
味方の痛む心もござりません外紀が一寸の智と
つゝ遠方の一月の智を討つ一月の智とつてすれ
ば一丈の智を復ひますと且つ怖るるものござりませ
んがそと越不一つの難者といふは程は南及北のついで

あるや、復か致し一味連判の一事と盗人を逐電
せしつゝの定て本玉へ返して外紀帆十舟兩個も
俺們が企て逐一報知つてござりませぬ然らば
とらぬ及北のつと燈人の中へ管帳家へ訴へ出
んと那等がうち一個のつと心算食入のつと
ませう先私に考へて片浦のふおつと外紀が
素らうつととあつてはさうとむ管帳家の方の山
を殿と和果といふつとぬん縁つとさ兼ての



高懸の毒をけりて今一毒毒殺の殺しとて工はる
より知れあるまの 一イヤヤ毒殺の毒はたれみなり
まをまの先達で大間曹益み中につけ毒茶酒合
殺させしとれ毒のりも毒も何ひて脱のりもをたれみ
代及ふまをやうとまるを毒を料理人の後津丹
次郎が備ふ毒を殺しと毒方殺の毒くあるを
たれまをまよりいふく 政毒が毒毒毒代及の食物
をどのつらるとおまをぶなり 一毒のりも脱のり毒
いふと毒をたれみ

毒が毒かまをまの 毒をく人彼毒とよるたれまを
この毒も脱とふ毒もまのこの中たれまをせんく
遠のり毒と殺さうより毒の毒をく 毒殺さう
まをたれまを脱くく毒をたれまを 一毒のりも毒を
たれまのり又毒助のりふ捕らまをたれ毒を脱く
りといふたれまのり 一工毒助のり毒の毒をたれ
まをせんく自己が力を毒のりと毒のり 一毒のりも
まをたれ毒のりもたれまをたれまを 一毒のりも毒のり

御前めと相ましと若ときりましと御合お授
政思が御御用お授しまたよ由仕損ふお授し
まささまの 鬼一ニテを思ひおめとゆことん何者お
中し付く 一サアを思ひごさあまをば御私方へ寄
若さまの 御御帆助と中を若者御浪人ごごり
まささまご由御ある武士の果ごごりましと先絶さ
一よお侍の思の御とゆか居りましと一私御那が
程と御しんましと如侍者大御と御せましと由

仕損トまど御とえ損ましとと先本御へきり
外記帆十舟が方へ思ひ込ませくえましとと外記
よ付あましとんごが御界の御りあをぬくと
飛越て逃しとましとこの御りあしと人との御りあ
せん 御御御く思ひせましとの御御ある御りあ
ませんう 御御御と御しとと心御しと御りあ
まささまの 御御と若と若人の御りあを御りあ
おませう 一いとうと御某の御御御しとと御りあ

もつとけしむが竊り延び人産はうとつめよ源正
公ゆき重さる肩而人そをらせ管時帆助と忠次
やうよ一室の裡不な夢せつ一相を方とゆび奇
せふは社本ふみくの御きと忠實公よ源く心
威を花ばりく心對面をさむとく人を兼く頼も一
一大車と作けりるとさよのりまうま方妙
湖と類ふといまけきとも何を俺們が月色うて
一ツの湖とわどろしていえさまいうと云つて帆

脚のまをま出へまの何よりか安いぞと云なつら
忠徳ハ人の慮と竊めてわどろす湖をぞおすまを
まが只今と申しとふ致さません今宵一歌の
うらあらば如何やうなるやもか好む次身よ四流ま
いさまをまどどをませう一毫も帆助とやらがチ
処を理千万なるぞ然らば今宵某が居るふ忠次
入り松えよとく重く忠のけ旅見の小物とが某かか
らぬやうよ盗もぬつてえせまいう帆一と云つて

一家の裡うちに因よりてありて、所ところまりふ、枕まくら助すけが、大おほいと、驚おどろか
來きりて、いふ、いふ、なぐ、郡ぐん由よしあり、人の曲まがり、さる、さる、が、仲な直ち
ま、ま、き、ま、あ、い、ん、く、か、の、振ふえ、と、力ちから、拵しらふ、か、け、う、る、從ま
み、ん、燈あかり火びの、辺へり、ち、う、く、き、を、く、鬼おに費つう、ま、づ、う、る、葉ち
と、ま、な、ど、く、浮う正せいと、食た、成なりま、づ、甲か、教けう、う、り、衆しゆ、
の、密ひそ、儀ぎ、と、田のり、方かた、山やま、の、ね、流なが、り、く、と、漢かん、史し、由よし、仲な、直ち、
く、お、り、も、教けう、示し、の、頃ころ、あ、る、ふ、小せう、教けう、更さら、る、符ふ、肌む、を、く
咄はな、し、も、い、り、く、そ、く、く、唐たう、ト、キ、ニ、浮う、正せい、邊へ、に、多おほ、利り、ふ、れ

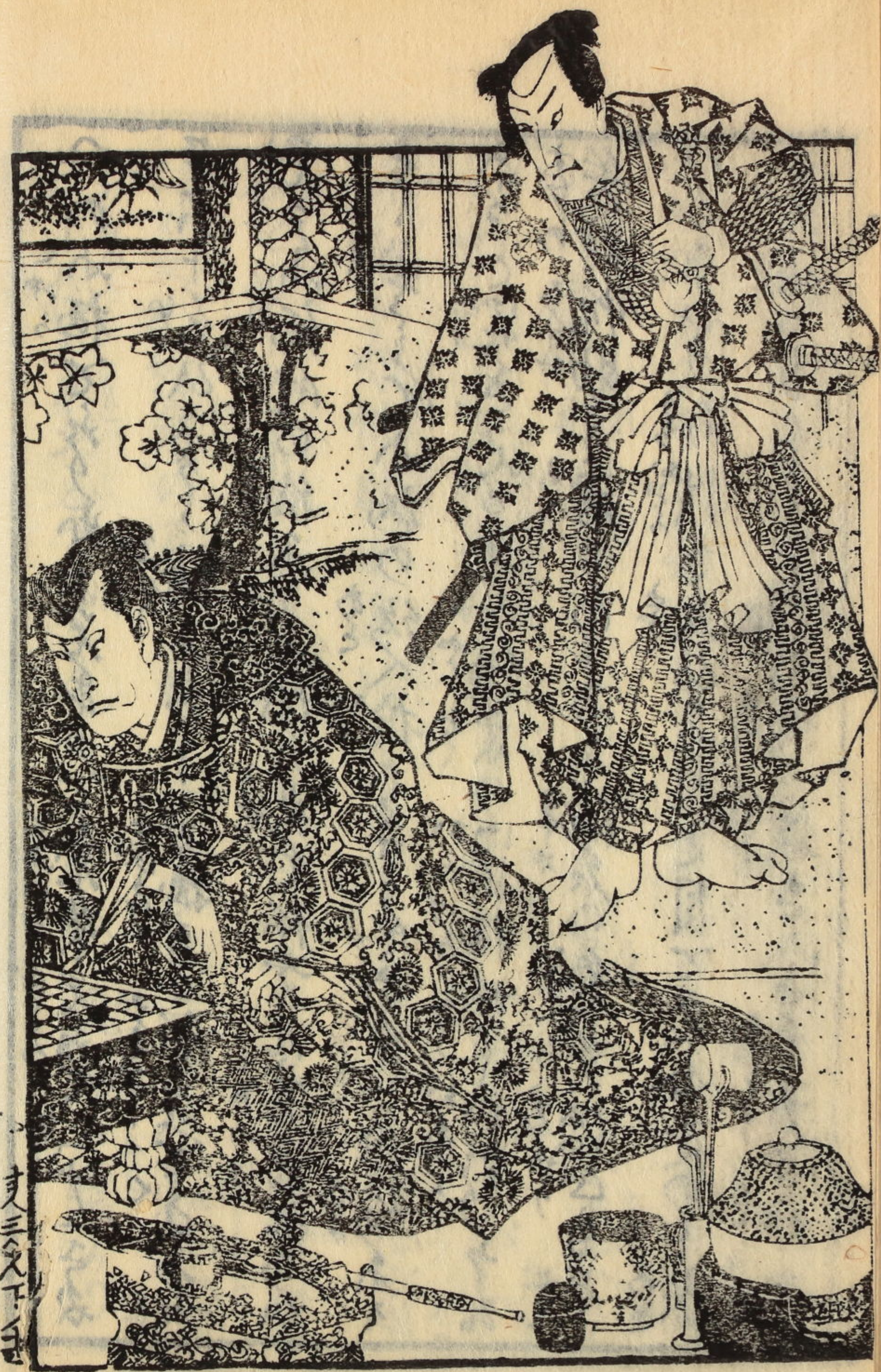
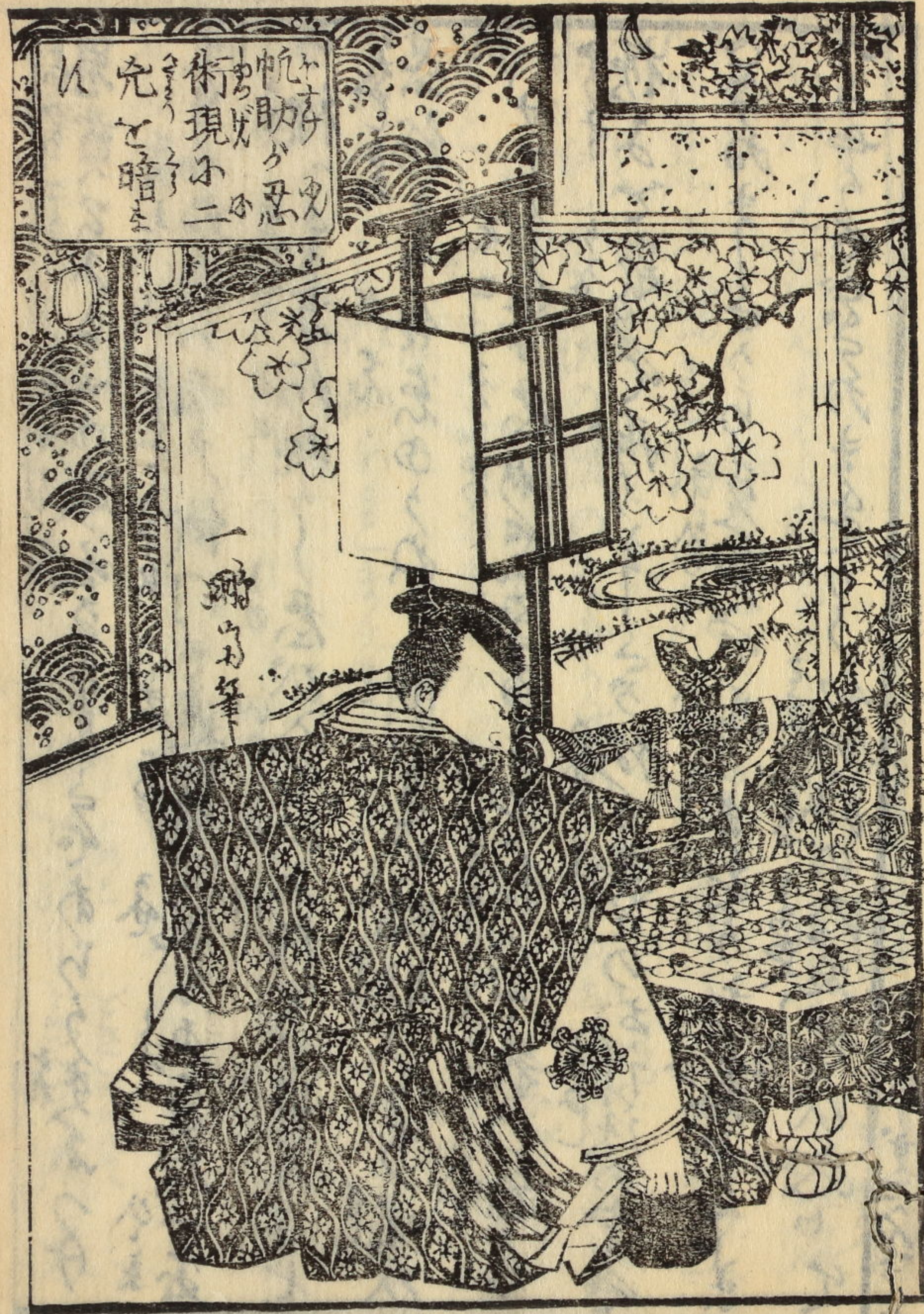
珍めづ、し、好すき、の、道みち、と、も、一いつ、向むか、ふ、け、拵しら、居ゐ、る、が、幸さい、ひ、の、今いま、宵よ、の
衆しゆ、衆しゆ、ま、ど、衆しゆ、の、明あや、る、小せう、禮れい、由よし、と、何なに、と、一いつ、石いし、教けう、を、り
か、の、あ、る、ま、い、う、深ふか、ト、千ち、奈な、で、こ、ご、お、ま、ま、を、う、あ、る、秘ひ、是ぜ、い、道みち、い
ふ、し、た、つ、き、さ、う、く、お、り、て、か、ね、ふ、あ、り、ま、せ、う、ト、も、い
つ、ま、迎むか、ひ、の、圍い、盤ばん、と、引ひ、寄よ、せ、素す、お、う、り、ね、む、な、る、ま、い、を
互たがひ、ふ、争あ、ふ、後あと、を、先ま、に、お、も、と、そ、う、く、圍い、む、符ふ、肌む、を、その
一いち、中ちゆう、の、浮う、正せい、が、拵しら、ふ、く、鬼おに、費つう、が、負お、と、り、う、く、い、鬼おに、費つう
い、衆しゆ、過あ、り、鬼おに、ト、ハ、テ、今いま、の、奉ほう、の、肩かた、に、坐ま、す、る、坐ま、す、る、い、な、る、と、が

遊覧する事と致しとサアく、事不空う一石のりせり
「只今見る事、私ガ猪キ、今彼ハ白石と
ありませう、ナニ何れも、今の十分の勝の
素と隅の一目と打損、とちかりて致ふとまうと
がまを、いし、何れも、生いあつこのどサア
サア、い、方ガ白石と、先でまのるが、真い、
是のい、か、肩と、そのやうと、さあ、ま、ま、候、空、一、石
致し、と、並、心、後、入、ま、せ、り、ト、又、盤、面、ふ、ら、ち、對、
し、

か、と、遊、し、て、お、秘、ふ、け、夜、の、ち、め、や、う、鬼、衆、か、石、組、さ、
滑、石、の、種、と、工、凡、と、め、ぐ、し、う、り、け、ま、も、終、ふ、に、み
目、の、肩、あ、る、あ、を、鬼、衆、の、鼻、の、何、う、と、ひ、こ、つ、せ
て、何、れ、致、し、と、お、ど、本、多、と、お、せ、が、は、む、り、以、來
碁、の、り、人、ぞ、の、大、ま、の、空、利、と、ア、ハ、ハ、ト、頻、り、お、負、ふ、入、る
御、ふ、何、時、の、る、お、や、り、時、刻、り、つ、つ、と、東、表、の、明、り、憲、ち、
あ、い、不、の、ぐ、と、ど、あ、ら、ま、け、の、任、る、お、し、由、次、の、る、より、
次、の、侍、が、信、「ハ、イ、中、上、ま、ま、を、只、今、策、陣、帆、助、と、い、ふ、者、

門を四月五日と預ひまをがぬ何致して道一
 ざらませりト云ひて鬼共をのつき一カ、墓のふふ
 糸結して那がらとりあ忘まて若しうまい是へと
 中せトりのま付をぬて秘多く帆助と連身目ば
 何振トや帆助あは秘結く中ととが某と海山が利
 公と致して居りさり流石なまさんどりのとつんるな
 一工お約束のあり盗まぬまてとざらまけん四指の
 お小柄の是でござらませりト云ひつ帆助の懐より一
 一ザ入十三丁

つの小柄とありかーつんるて鬼共をまて一十二さぬ
 是のト云ひるがう傍小をー刀搦るる脱走てもあは
 何所いつの秘ひふう小柄こびらの失うせて何やん書付かきつけとちい
 きくきくて小柄こびらの秘ひ人ひと推おしもまてありしうう何なにあ
 ありとあり深ひきこるる小こ柄びら約束やくそくのこ小柄こびら結むすくこ中ちゆうに
 策さく建けん帆はん助すけと徳とくめありあを流なが石いしの鬼おに共ども入いれ深ひ心こころ由よし是
 へとへとわたり振おと續つき互たがひひ小こ月つきと目めとつん合あまののと果あき
 是こゝをこゝ辨わるるなるるししがが一一傳つたへへとと方かたがが物もの術じゆつ



び出ま—とが那素の大きと深正根が少—か肩す
ありま—とらり私が入ると意とか敷い—く
—はまをあらか出るさつて四流トま—意の格ふが
二本たるられて雨戸の掛鉄らたる目とて居るは意と
おまきとりのみふ二個のり—績き先かの意と改め
貝ふ帆助が穉小達ゆぬのさう二個がお—素の
ふまを委—く知るるうく—今さり敷ふやうも
る—鬼貫依と窓と改め—毫ふ不欠る休がゆ
いす二三と

おのりく—那一大身と弾正とも不頼んで呉—やれ
—作のあり密とあくや角とでござるませうか
那素が子の内での仕損とあるまいるれど程も方便
とあぐ—とが肝要でござるませれば幸ひ近所
代居あり大敷より他へ出のつぬゆ人若くは病も
出るとは心の大切の折るまぶかん懸と作—りれ
あふふ名と白踊みと下方よりゆび登せ深更不及が
ま—舞囃のせらるの結ふ帆助と大衆く忠をせ

かたは夜更そ宿直の人々も勞はして休む一透と見え
とぬ一大小小及びんあひ千小一ツのさしあひのさしあひ
と名知すまわれが事の色度と作合さすは何となく
此禁教小踊りてお初めるされま一鬼一いろさぬ是
ハ名ひつぎ事の色の正直一遍の人たぬ何やう小の云
ひくあめて僕小は養と初めるを何らう帆助の深
いし中し合色首尾より大小と仕とあせさるが一處
ふねを治させり是の當所の療養をよとてかの所見

お小柄と浴へて浴をそと帆助の裁きさうりこびと渡
別と岩で弾心侶僕鬼交が弟と竊小退さける
撰者曰先是まんの群書小の必又右講師由説く
ととらるると聊却向と換するのそ是より處を状
の要殿みて踊と僕を仕組小のり例の枝系
と添ゆるとりて青紙と當せりける釋小終るはし
兼舟帆助が大い入へ忍び入るの一段まを腹稿
ハ做とれこれとも丁教を小傳り何言ふは編小

小説界の発展の源と次巻と易く四輯
河内の子孫一着友發布と此と後々
後とねが

珍説千代磯三輯下了

51

